

# 黒い家

2008(平成20)年2月1日鑑賞<角川映画試写室>

★★★★



特集

熱狂的ブームの去った今こそ真価を問う！

監督＝シン・テラ／原作＝貴志祐介『黒い家』（角川ホラー文庫刊）／出演＝ファン・ジョンミン／カン・シニル／ユ・ソン／キム・ソヒョン／キム・ジョンソク／ユ・スンモク／イ・ヘヨン（角川映画配給／2007年韓国映画／104分）

……大竹しのぶが熱演した森田芳光監督版『黒い家』（99年）は印象に残る名作だが、その同じテーマが韓国版に。映画後半のサイコスリラー的展開は韓国映画特有のものだが、法律上の論点は全く同じ。『映画と法律』のネタとしてはもちろん、法科大学院の教材として最適！ 法律を学ぶ人たち必見の映画として、超お薦め！

## あの有名なセリフが……

大竹しのぶが恐い役を熱演した森田芳光監督の『黒い家』（99年）は、強く印象に残る日本映画の傑作だが、その冒頭のセリフは女性の声での「自殺でも保険金は下りるの？」というもの（『シネマルーム1』87頁参照）。そんな貴志祐介の原作を韓国版として映画化したのが、シン・テラ監督の同じタイトルのこの映画だが、韓国版でも全く同じそのセリフが……。

ちなみに、その答えは、日本の生命保険約款では生命保険契約締結後2年以内の自殺の場合は保険金は出ないが、2年を経過した後の自殺なら出る（1999年以降、それまで1年だったものを2年にした生命保険会社が多い）ということ。

## 主人公は保険会社査定員！

日本版では大竹しのぶの存在感が光っていたが、ストーリー展開上の主役はあくまで内野聖陽演じる保険会社査定員の若槻慎二だった。それは韓国版も同じで、保険会社査定員チョン・ジュノを演ずるのはファン・ジョンミン。ジュノがそんな女性からの問い合わせに対して、応対マニュアルの枠をこえ「自殺なんかしてはダメですよ」

などと無用なお節介をしたのは、自分が子供の頃弟を死なせてしまったという罪の意識をずっと持ち続けていたため。もちろん、こんな対応はジュノの誠意の表われだから、何ら責められることではない。ところが、彼がそんな発言をしたうえ自分の名前を名乗ってしまったため、その後ジュノはもちろん、彼の恋人の医師チャン・ミナ（キム・ソヒョン）をも巻き込んだ大変な事件に発展していくことに。やはり口は禍の元……？

## 自殺、それとも保険金目当ての殺人……？

今、彼は上司のナム・サンス（キム・ジョンソク）の命令によって、板金工場を営むパク・チュンベ（カン・シニル）の工場の応接室に1人座っていた。それは、なぜかチュンベからジュノを名指しで来てくれと要請されたため。ところが何とも奇妙なことに、そこで彼が目撃したのはチュンベの息子ポフンの首吊り自殺。なぜ彼がその第1発見者になってしまったのだろうか……？ ひょっとしてこれは仕組まれたものかも……？

チュンベは、自殺でも保険金は支払われるはずだと主張して保険金を請求してきた。しかし、保険金目当ての殺人の疑いがあるため、保険会社は「調査中」を理由に、その支払いを留保。すると、チュンベは毎日のように会社に押しかけ無言の（？）抗議を……。

ちなみに、映画冒頭の問い合わせをしてきたのは、チュンベの妻シン・イファ（ユ・ソン）だったのだが、それがジュノにわかったのは、ずっと後になってから……。

## 特殊調査員とは……？ 裏の顔の日韓比較は……？

ジュノが銀行員から保険会社の査定員に転職したのには大きな理由があった。それは、自分たち家族が生きていくことができたのは、ある保険契約があったおかげと強く認識しているため。そのため彼は、「保険にはダイヤモンドの輝きもなければ、パソコンの便利さもありません。けれど目に見えぬこの商品には、人間の血が通っています。……」というどこかのコマーシャルのように、保険の価値を信奉していたわけだ。今ドキ保険の価値をそこまで信奉し、査定員としての仕事に彼ほどの使命感を持った社員は少ないはずだから、こんな転職組の社員は貴重。

ところが、保険会社にはそんな表の顔とは別に裏の顔があることが、この映画の特殊調査員マ・ヨンシク（ユ・スンモク）の言動をみているとよくわかる。特殊関係人（＝愛人）という言葉は、伊丹十三監督の『マルサの女』（87年）で有名になったが、『黒い家』でいう特殊調査員とは、詐欺まがいの保険金請求をしてくる契約者に対して、脅迫まがいにその取り下げを要求する人間のこと。

ヨンシクの言い分は、「この書類にサインさえすれば、警察の世話になることはない。また保険金は支払われないが、今まで支払った保険料は戻ってくる」というものだ。新米の査定員にすぎないジュノはそんな特殊調査員の存在を知らなかったが、上司のサンス課長は必要に応じてこんな特殊調査員を活用していたからビックリ。そもそもこんな「裏の顔」がどこまで許されるのか自体が大問題だが、日本版では小林薫扮する「潰し屋」三善がこの役だった。さて、この「裏の顔」の日韓比較は……？

## 反社会性人格障害とは……？

ジュノたちの調査の結果、チュンベは「指狩り族」（すなわち、自分の親指を切り落として保険金を請求していた）としてブラックリストに載っている人物だということが明らかに。そうすると、息子の自殺についても保険金目当ての殺人の疑いが濃くなったのは当然。そんな中、チュンベの要求や嫌がらせは次第にエスカレートし、ジュノの留守番電話には連日30件もの無言電話が入る始末。

そこで、恋人のジュノがそんなトラブルに巻き込まれるのを嫌い恐れたミナは、知り合いの心理学者スングュ（イ・ヘヨン）に調査依頼したところ、スングュがチュンベに対して下した診断は「反社会性人格障害の可能性あり」ということだった。こんな病名がホントにあるのかどうか知らないが、こんな障害のある人間を相手にすればとにかく大変。

ジュノの調査の結果さらに明らかになったのは、妻のイファに3億ウォンもの生命保険がかけられていること。すると次のターゲットはきっとイファ……？ そう直感したジュノはイファに対して匿名の手紙を出し、チュンベとの離婚もしくは生命保険の解約をアドバイスしたが……？

## やはり若い美女の方が……

日本版『黒い家』では大竹しのぶの熱演が光っていたから、イファ役には彼女と同

じ年代の演技派女優を据えるのも1つの案。しかし、韓国には若くて美人の演技派女優がゴロゴロいるのだから、やはりおじさんの目にはそういう女優を怖い役に据えてくれた方がうれしいのは当然。

シン・テラ監督がそんな私の期待に応えてくれたわけではないだろうが、恐怖の女イファ役を演ずるユ・ソンは、1976年生まれの美女。『4人の食卓』（03年）では、『猟奇的な彼女』（01年）の主役を演じたチョン・ジヒョンの陰に隠れていた（『シネマルーム6』86頁参照）が、『黒い家』ではあの手、この手の怖い演技に文字どおり体あたり！

韓国のホラー映画にはやはり若手美人女優がよく似合うと納得！

### 『ディスタールビア』を彷彿……？

プレスシートは、「ドラマ性を重視した日本版とは全く違うアプローチにより脚色、スリラー映画の最新トレンドを盛り込んで、強烈なショック・シーンとバイオレンス描写が怒濤のごとく連続するパワフルなサイコ・スリラーに仕上がった」と紹介しているが、この映画の特徴はまさにそのとおり。

韓国版『黒い家』後半における板金工場の巨大な地下室内での恐怖シーンは、『ディスタールビア』（07年）後半の地下室での恐怖シーンを彷彿させるもの。もちろんその内容をここで紹介するわけにはいかないから、その恐怖はあなた自身で味わってもらいたいが、韓国版が「黒い家」というタイトルを単なるイメージだけではなく、実体を伴ったものに仕上げることに成功したのは、美術さんがこんな恐怖の空間を見事に演出したおかげ……。

### 『映画と法律』の貴重なネタに

私がずっと目指しているのは、さまざまな法律上のテーマを扱った映画から「生きた法律」を学ぶために、『映画と法律』シリーズを出版すること。そして、「保険金詐欺」という重要な法律上のテーマを扱った日本版『黒い家』は、その貴重なネタとして、私が映画ネタの講演会で常々紹介していたもの。そんな私だからこの韓国版『黒い家』は必見だったが、後半のホラー映画としての恐ろしさは別として、法律上の論点は日本版と全く同じ。したがって、そこでの収穫は韓国の保険法も日本と同じ体系らしいとわかったこと……？

そうなると次の興味は、近時「法治主義」を強め、物権法や労働法などの新法を次々と制定している中国ではどうなるのだろうか、ということ。日本の生保会社、損保会社の中国への進出が顕著な昨今、誰かが中国版『黒い家』を企画してくれることを期待しよう。

ちなみにこの映画は、保険会社査定員の仕事内容はもちろん、保険金詐欺事件の実態やその実務処理の実態を学ぶうえで法科大学院の教材として最適。したがって、90分のくだらない授業よりこの映画1本の上映の方がよほど有益だと私は思うのだが……。

「自殺でも保険金は出るの？」これは森田芳光監督版『黒い家』(一九九九年)での、主婦役大竹しのぶのセリフだが、韓国版で韓流美女、ユソンの口から同じセリフが、'生命保険契約締結後二年以内の自殺はダメ。その後の自殺ならOKとの査定員チヨンの答えは正解だが、自他殺が焦点になると判定は大変！」さらに名指しで呼び出されたチヨンが、町工場経営者バクの息子の首つり遺体の第一発見者ともなれば問題は複雑。こりゃ計画的な保険金詐欺事件？

「保険にはタイヤモンドの権きも、バクコンの便利さもありませんが、この西品には目に見えない拒否も当然？ それに人間の血が通つていまい対するバクの抗議は執拗で、無言電話にチヨンはタジタジ。その場で尋問する特殊調子が、本件では「調査中」が、そんなCMもあるで、無言電話にチヨンはタジタジ。その場で尋問する特殊調子を理由とする保険金支払」

# 保険金殺人に見る日韓気質比較！

この西品には目に見えない拒否も当然？ それに人間の血が通つていまい対するバクの抗議は執拗で、無言電話にチヨンはタジタジ。その場で尋問する特殊調子が、本件では「調査中」が、そんなCMもあるで、無言電話にチヨンはタジタジ。その場で尋問する特殊調子を理由とする保険金支払」

「保険にはタイヤモンドの権きも、バクコンの便利さもありませんが、この西品には目に見えない拒否も当然？ それに人間の血が通つていまい対するバクの抗議は執拗で、無言電話にチヨンはタジタジ。その場で尋問する特殊調子が、本件では「調査中」が、そんなCMもあるで、無言電話にチヨンはタジタジ。その場で尋問する特殊調子を理由とする保険金支払」



## 黒い家

きょうからシネマート心斎橋ほかで公開



©2007 CJ Entertainment Inc. All Rights Reserved.

「裏の人物」の存在と役割の再確認も！  
バクが業界隠語で「指狩り族」と呼ばれる、自分の指を切り落としてまで保険金を請求する男で、反社会性人格障害」と判明した今、次の標的は三億ウォンの保険金が掛けられた妻。そう血感したチヨンは、バクとの離婚と生命保険の解約を進めるが、本心にそれで問題は解決？  
妻は本当に被害者？  
女の怖さは日韓共通だから、ユソンの取る

大阪日日新聞 2008(平成20)年4月19日

2008(平成20)年2月1日記